

## 十九、木造薬師如来立像

江戸時代

植田薬師堂 大字植田字中ノ内

像高 六五・八cm

一木造 玉眼嵌入 彩色

両眼を欠き、左手指先や両足先が一部失われ、彩色も剥落がひどく、保存状態は良好とはいえない。さらに現在の彩色は、後で施されたもので、それが厚く像を覆っており、全体に鈍い表現となっている。

粒状の螺髪を彫出し、左肩にかかる衲衣と右肩を覆う偏衫へんさんをつけ、左手を垂下し、右手をあげて立つ。薬師如来の持物である薬壺は失われている。

構造は、基本的には頭体の大部分を一材で彫出し、背面より像内を削り、そこに板を当てている。一木造であるが、一木の割



木造薬師如来立像

には量感に乏しく、体軀が偏平となっている。また衣の襞も直線的で、変化がない。

江戸時代の形式化した作風を示している。

薬師堂に寛政六年（二七九四）の棟札が残されている。それには、この年に薬師如来をこの堂に納めたことが記されており、この像の造立もその頃と考えられる。なお薬師堂は、もこの堂の南にあった観音寺という寺の一堂であった。観音寺は、すでに廃され今はない。

## 二十、木造十一面観音菩薩坐像

室町時代

徳林寺 大字常世北野字赤坂

像高（現状）三〇・八cm

一木造 彫眼 彩色

垂髻及び垂髻上の仏面を失っており、天



木造十一面観音菩薩坐像

冠台上に一列に九面を配す。正面の顔を入れて十一面となる。また天冠台正面中央には化仏立像をおく。左肩を覆い右肩に少しかかる衲衣をつけ、左手に水瓶すいびょうをとり、右手は膝上におき五指をのばし、結跏趺坐する。

構造は、垂髻部に別材を短くのみで、頭上面や左手持物をも含んで、頭体通して一材で彫出する。首よりかける銅製の胸飾むねかざりは、後世につけられたものである。また彩色なども、後に施されたものかもしれない。

頭体通して両腕まで一材で彫出しており、